

市町村等の地域の医史探訪会を行なっている。いずれは会員共同研究会、他団体との共同講演会・顕彰会等も行ないたいと考えている。

参考までに研究発表会および会誌に発表した主な論文を紹介しよう。

戸塚静海とその一族の史跡（舟木茂夫）・明治二十五年掛川で行われた帝王切開術（中川長一）・柏原学而の牛病新書について（土屋重朗）・日坂宿にシーボルトを訪ねた医師について（舟木）・県立掛川病院創業事情（中川）・女理講の成立背景について（舟木）・掛川藩の医事医療施設（須貝文書から）（岩崎鉄志）・種痘をめぐる地域史料（川田文書から）（舟木）・保全病院と富士病院（土屋）・坪井信道と静岡病院（津田進三）・江戸中期の思想家安藤昌益について（堀寛）・保全病院の規則（土屋）・榎日記（芹沢武男）・戸塚静海と種痘（舟木）・静岡県初期の新聞と医史（土屋）・掛川藩の洋学（舟木）適塾門人本間恒哉とは（舟木）・林紀とパリの暮（土屋）

なお秋の医史探訪も県内主要都市はほとんど廻り、それぞれ多くの成果をおさめた。

（土屋重朗）

京都医学史研究会

（沿革） 京都には江戸時代から医学史研究の伝統があった。黄川道祐は本邦最初の医学史書といわれる『本朝医考』（寛文三年）

を、また畑維龍は『皇国医林伝』（文政五年）をだした。

明治以降も竹岡友仙は『京都医事衛生誌』（明治廿六年創刊）を通じて医学史啓蒙を行い、その子息の友三は『医家人名辞書』（昭和六年）を刊行した。また京都大学病理学教授藤浪鑑（慶応大学藤浪剛の令兄）は医学史に理解が深く、特に富士川游との友情によって富士川文庫約一万冊が京大へ寄贈された（大正五年）。

昭和初期、佐伯理一郎・川井銀之助らは日本医史学会の初期の同人であった。大戦前後より大矢全節・阿知波五郎らは、大阪の中野操・三木栄らと共に杏林温故会を結成し、戦後は日本医史学会関西支部と改組して上方を中心として盛んに医学史研究を行い、『医譚』を発刊し、更に現在に及んでいることは京都にとっても幸運であった。

戦後京都における医学史的事業の主なものを書き記す。昭和二十五年五月、京都府医師会は京都種痘術創始百周年記念祭を行って日野鼎哉の功を顕彰した。昭和三十年四月、第十四回日本医学会総会の際に、京都国立博物館で「医学に関する美術資料展」が開催され、『医学に関する古美術聚英』が刊行された。昭和三十八年四月、山脇東洋二百年祭に当り、京都府医師会館に於て展示会及び講演会を開いた。昭和五十年四月、第十九回日本医学会総会に協賛して、京都府医師会主催の「京都の医学史展」を府立資料館で開催した。

ついで医家先哲顕彰の機運にのって、昭和五十一年三月には山脇東洋観念碑を解剖の場所である京都感化保護院の前庭に建立した。翌五十二年九月、賀川玄悦二百年祭に当り顕彰碑を玉樹

寺に建立し、翌年六月には水原秋桜子の産論句碑を建てた。五十二年、京都府医師会の一事業として、京都の医学史編纂委員会を設け委員十二名の分担執筆によって、平安初期より十九世紀末までの京都の医学史の編纂に着手した。阿知波五郎・山田重正・宗田一らを中心として三年の歳月を経て、昭和五十五年三月に本文篇（一四三二頁）を、八月に資料篇（五五一頁）を思文閣出版より刊行することができた。この直後、医学史編纂委員会は医学史資料室へと衣がえした。

しかし医学史資料室は室員十名よりなる府医師会の一機関であり、活動も制限されている。そこでこれをバックアップして医学史研究をより幅広く且つスムーズに行うことを意図して、昭和五十五年十月二十二日、京都医学史研究会の創立をみた。それ以来七年有余、地道ながら毎月研究活動をつづけている。その後、京都に於ては昭和五十七年六月、守屋正会長のもとに第八十三回日本医学史学会総会を開催した。さらに昭和五十九年十月十日、日本医学史学会と日本東洋医学学会の主催で、医心方一千年記念碑を泉涌寺山内観音寺境内に建立除幕し、思文閣美術館で講演会と日本の医学一千年展を行ったが、本会々員はこれら諸事業の中核としてその実行に当った。

（会員）現在会員数七十名、別に講読会員（『啓迪』送付のみ）約四十名。入会希望の方は事務所まで申込まれたい。

（役員）顧問・宗田一・守屋正・山中太木、会長・杉立義一、副会長・藤垣亀雄・中橋弥光、理事十名、監事二名。

（例会）例年八月を除いて毎月例会を行っている。一月第二日曜日

後に京都市内にある医家先哲の墓参を行い、そのあと新年懇親会を行う。三月と十月には京都・大阪在住の著名な医史学者・歴史学者を招いて医学史に関する講演会を行っている（別表一）。五月と十一月は市内・近隣の図書館・資料館等の見学会、昨年からは日本医学史学会関西支部と共催で研究発表会を行っている。他の二・四・六・七・九・十二月の第一木曜午後二時より四時まで、京都府医師会館において通常例会を行っている。前半は会員の研究発表を、後半は宗田一氏を講師とした抄読会を行っている。

（会誌）会誌『啓迪』は昭和五十八年より年一回、四月に発行し今年で第五号を数える。誌名の『啓迪』は、曲直瀬道三の『啓迪集』より引用した。題字は本会会員でもあり、元京都府医師会副会長であり、現在高野山真言宗管長の阿部野竜正師の書である。『啓迪』所載の論文は別表一の通りである。別に会誌を年一回発行。

（事務所）京都市中京区御前通松原下ル、京都府医師会館内（電話〇七五—三二—三六七一）におき、坂上俊之が事務を総括している。

（会費）年額三千円、入会金不要・購読会員（『啓迪』送付）は年額千円でず。

以上本会の沿革・現状を報告した。単に京都に関する医学史研究のみでなく広く東西の医学史とその関連事項の研究と一般医師会員、市民への啓蒙も目的としている。ただ浅学のため先輩の輝かしい伝統を汚すことをおそれるものである。広く同学の方々

入会と御指導をお願いする。

表一 医学史講演会題名と講師

昭和五十五年十月「医学史研究の現状」宗田一

昭和五十六年三月「歴史と人物」奈良本辰也

昭和五十六年十月「文明開化期の細菌学」藤野恒三郎

昭和五十七年三月「白河法皇の死亡原因について」角田文衛

昭和五十七年六月「松尾芭蕉の鹿島紀行と自準享稽医館の医学」

山中太夫

昭和五十八年三月「京都文化の形成—その成立と展開」森谷尅久

昭和五十八年十月「明代の学問と日本への影響」藪内清

昭和五十九年三月「江戸時代の京都の本草学者たち」北村四郎

昭和五十九年十月「医心方一千年記念講演会」

昭和六十年三月「東アジア古代日本」上田正昭

昭和六十年六月「西ドイツにおける医の倫理」エドアルド・ザ

イドラー

昭和六十年十月「緒方洪庵と適塾」

昭和六十二年三月「日本文化の模倣と独創」上山春平

昭和六十一年十月「人類史からみた現代—技術史の立場から」山

田慶児

昭和六十二年二月「角倉家の歴史」林屋辰三郎

昭和六十二年十月「新しい意味での医の倫理」星野一正

表二 『啓迪』所載原著（資料省略）

第一号

「室町時代以前の疾疫について」山下喜明

「大徳寺・真珠庵蔵の半井家画像の補訂」宗田一

「山城淀藩の医学から」山田重正

「京都における解剖の場所について」杉立義一

「龍門薬方と耀泉孫真人祠」赤堀昭

「コース島のヒツボクラーテースの樹について」守屋正

第二号

「北小路家（安芸家）の歴史について」北小路博央

「宮廷人の医家—補遺」山田重正

「玉碎臓凶」補遺」宗田一

「同志社病院・京都看病婦学校に関する二、三の知見」指宿照久

第三号 阿知波五郎先生追悼号

「親康家伝来の『仙洞御歯』について」杉立義一

「『文政二年村上玄水解臟記』について」森博

第四号 山田重正先生追悼号

「錦小路頼徳と防長」田中助一

第五号 津島如蘭の墓碑と『津島家譜』について」末中哲夫、遠藤正治

第五号

「味岡三伯とその周辺のことども」近藤鏡夫

「山脇東洋と若狭」杉立義一

「京都駆徴院の変遷について」永利満雄

(杉立義一)